

一、次の話を読みながら、〈かっこ〉内の助詞や接続詞の正しいと思われる方に丸をつけなさい。

## 『オツベルと象』

みやざわけんじ  
宮沢賢治

……ある牛飼いがものがたる

だいいちにちよう

第一日曜

オツベル〈と〉きたら大したもんだ。稲扱器械〈で〉六台

も据えつけて、のんのんのんのんのん〈が〉、大そろし

ない音〈を〉たててやっている。

じゅうろくにん  
十六人の百姓どもが、顔〈を〉まるつきりまつ赤〈が〉し

て足〈で〉踏んで器械をまわし、小山〈と〉のように積まれた

稲を片つぱし〈でも〉扱いに行く。藁〈は〉のどんだんうしろ

の方へ投げられて、〈でも〉新らしい山〈に〉なる。そこら

は、粃〈やわら〉藁から発ったこまかな塵〈で〉、変にぼうつと

解答は次ページ

黄<sup>き</sup>いろ<sup>に</sup>がなり、まるで沙<sup>さ</sup>漠<sup>ばく</sup>のけむり<sup>の</sup>とようだ。

そのうすくらしい仕事<sup>しごと</sup>場<sup>ば</sup>の、オツベル<sup>に</sup>は、大<sup>おお</sup>きな琥<sup>こ</sup>

珀<sup>はく</sup>のパイプ<sup>を</sup>くわえ、吹<sup>ふ</sup>殻<sup>が</sup>を藁<sup>わら</sup>に落<sup>お</sup>さないよう、眼<sup>め</sup>

を細<sup>ほそ</sup>くして気<sup>き</sup>でつけながら、両<sup>りょう</sup>手<sup>て</sup>を背<sup>せ</sup>中<sup>なか</sup>に組<sup>く</sup>みあわ

せて、ぶらぶら往<sup>い</sup>ったり来<sup>き</sup>たりする。

小<sup>こ</sup>屋<sup>や</sup>は、ずいぶん頑<sup>がん</sup>丈<sup>じょう</sup>で、学<sup>が</sup>校<sup>っこう</sup>ぐらいがあるのだ

が、何<sup>なに</sup>せ新<sup>しん</sup>式<sup>しき</sup>稻<sup>いね</sup>扱<sup>か</sup>器械<sup>きかい</sup>が、六<sup>ろく</sup>台<sup>だい</sup>にそろってまわってる

から、のんのんのんふるうのだ。中<sup>なか</sup>のはいると

そのために、すつかり腹<sup>はら</sup>を空<sup>す</sup>くほどだ。そ<sup>そ</sup>してじつ

さいオツベルは、そいつで上<sup>じょう</sup>手<sup>ず</sup>に腹<sup>はら</sup>をへらし、ひる

めしどきには、六<sup>ろく</sup>寸<sup>すん</sup>ぐらいのビフテキだ<sup>が</sup>、雑<sup>ぞう</sup>巾<sup>きん</sup>ほ

どあるオムレツ<sup>の</sup>、ほくほくしたの<sup>を</sup>でたべるのだ。